

# 平曲資料に反映した四音節動詞のアクセント：中世前期以前における低起式動詞の体系に関して

著者	奥村 和子
引用	女子大文学. 国文篇 . 1995, 46, p.67-79
URL	<a href="http://doi.org/10.24729/00011093">http://doi.org/10.24729/00011093</a>

# 平曲資料に反映した四音節動詞のアクセント

—— 中世前期以前における低起式動詞の体系に関して ——

奥村和子

## 一 はじめに

中世における京都語アクセントの体系的変化に際し、いわゆる四音節二類動詞（「表す」「動かす」類）連用形はやや奇妙な動きを見せる。体系的変化に従えば○○●●型は●●○○型へと変化するはずだが、中世前期まで○○●●型であった二類動詞連用形は中世後期以降●●○○型となつて現れるのである。

これについて金田一春彦氏は、連体形○○○○型や二・三音節二類動詞（「切る」「立つ」／「動く」「思ふ」類）連用形○○●●○○●●型への類推から、鎌倉期に連用形が一度○○○○●●型（もしくは○○○○●●型）になり、そこから○○○○●●○○○○の変化を起こしたものと説明されている（注一）。だが、それまで○○●●型であったものが、何故鎌倉後期に一斉に○○○○●●型へ変化したのか等、解せない点も存する。「動かす」「摩かす」

「悩ます」「励ます」等の二類動詞は、語構成から考えれば三音節二類動詞特殊未然形（注二）十助動詞「す」で○○○○●●型になつてゐるはずのものである（注三）。そのような意味では

○○●●型からの変化形以外に、ずっと○○○○●●（○○○○●●）型を保つていたものもあつたはずである。文献に現れなかつただけで、○○●●型と共に○○○○●●型も存在していたのではなか。むしろ○○○○●●型から○○○○●●型が生まれた可能性も考えられる。そもそも○○○○●●型と○○○○●●型の関係は、三音節動詞で言えば二類（○○●●型）と三類（「隠す」「参る」類。○○●●型）の関係に相当する。三音節動詞の場合は三類○○●●型の存在故に、二類語末の●●型が窮屈であつても○○●●型へ変化するとはできないが、四音節動詞の場合にはその障害が無いわけである（中世前期までの四音節動詞における低起式動詞は二類の他、○○○○●●型と○○○○●●型とが存する―注四）。

これに関連して三音節二類動詞と三類動詞の混乱も問題となるところである。体系的変化以前の三音節三類動詞特殊形は二類動詞特殊形と同形の○○○型とされているが、平曲譜本や浄瑠璃、現代方言等におけるアクセントからこれに反対する意見が多い(注五)。では平曲譜本において「三類動詞特殊未然形+助動詞『す』」「三類動詞特殊未然形+助動詞『る』」といった語構成の四音節動詞(「参らす」「捕らはる」等)はどうなっているか。少数であっても●○○○型・●○○○型(それぞれ○○○+●型、○○○+○型からの規則的变化形)が見られれば、前者の説も簡単には否定できないわけである。

古代京都語アクセントを反映している文献としては、類聚名義抄や日本書紀古写本、古今和歌集声点本、四座講式、補忘記、平曲譜本等様々なものがあるが、中でも語彙の多さという点で優れている資料が平曲譜本である。特に多音節語は、基礎的語彙の多い少音節語に比して文献に現れにくいため、平曲譜本の特性が効果的に発揮される。物語形式故に動詞各活用形の用例も豊富であり、体系的な調査にも適している。しかし平曲譜本における四音節以上の語彙については未だ調査が完全でない。本稿では、前の如き問題点も考慮しながら四音節動詞についての調査・整理結果の報告を行うこととする。

なお、終止形と連体形の合一により、時代によって終止形の音節数の異なる動詞がある。そのため、四音節動詞という言葉の定義もまちまちであるが、本稿では基本的に古典語の終止形が四音節である動詞を指すこととする。すなわち①すべての活用形が四音節である動詞(四段活用動詞)、②終止形四音節・連体形五音節の動詞(二段活用動詞等)である。

## 二 調査及び結果

平家物語中から四音節動詞を抜き出すと、その異なり語数はおよそ七百五十語にのぼる(注六)。しかし、いわゆる複合動詞はその熟合度によって複合前の二語のアクセントを保っている場合があり、一語としてのアクセント体系を考える上でやや問題となる(注七)。そこで本稿では、明らかに二語の動詞から成る複合動詞及び複合サ変動詞を調査対象から除き、残り二百二十七語(①四段活用動詞百七十七語、②二段活用動詞五十語)について調査を行うこととする。

尾崎家本平家正節(注八)において、これらの動詞に付されている譜記を調べ、それが明らかにあるアクセントを反映していると思われるものを整理し分類すると、次のようである。な

おハV内には、一般形と異なる場合のみ特殊形の型を示した。  
\*印は平曲中に確実な用例がなく、他から推定したものである。

## 二一、四段活用動詞

【A類】未然形●●●／連用形●●●△\*●●●V／終

止形●●●／連体形●●●／已然形●●●△／命令形●●●

○

【B類】未然形●●●△／連用形●●●△／連

●●V／終止形●●●△／連体形●●●△／已然

形●●●△／命令形●●●○

【C類】未然形●●●／\*連用形○●●△\*●●●V／

終止形○●●●／\*連体形○●●●／\*已然形○●●●／\*命

令形○●●○

【D類】未然形●●●△／連用形●●●△／終止形●●●△／

連体形●●●△／已然形●●●△／\*命令形●●●○

【E類】\*未然形○●●△／連用形○●●△V／連

終止形○●●△／連体形○●●△／\*已然形○●●△／\*命令

形○●●○

所属語彙は以下の通りである。

【A類】遊ばす(Bも)／憐れむ(Bも)／あなどる／▲いざ

なふ／いたたく(Dも)／▲営む(Bも)／▲卑しむ／失ふ／

疑ふ／うやまふ／怠る／行ふ／輝く／重なる／語らふ(Bも)

／悲しむ／通はす／悔しむ／候らふ／先立つ／さぶらふ／▲し

たがふ／▲たなびく／▲楽しむ／たばかり／たばさむ／遣はす

／伝はる／とどまる／弔ふ(とぶらふ)／訪ふ(とぶらふ)／

伴ふ／慰む／ののしる／育む／始まる／働く／はばかり(Bも)

／塞がる／振舞ふ／欲しがる／施す／亡ぼす／導く／むつかる

／めぐらす／やはらぐ／よそほふ／よっぴく／若やぐ／わずら

ふ／▲をさまる

【B類】▲欺く(Aも)／預かる／集まる／怪しむ(Aも)／

あやまつ／争ふ(Aも)／表す／▲息づく／いさかふ／いたは

る／うなづく／占ふ／羨む／潤す／驚く(Aも)／赴く／蒙る

／片敷く(Aも)／傾く／かなぐる(Aも)／からかふ／がら

めく／極まる／▲ざざめく(Aも)／ささやく／定まる(Aも)

／しぐらむ／静まる／しつらふ(Aも)／退く／備はる／助か

る(Aも)／戦ふ／たたずむ／▲漂ふ(Aも)／賜る／近づく

／繕ふ／つぶやく(Aも)／爪よる／▲連なる／貫く(Aも)

／ときめく／どよめく／靡かす／悩ます／計らふ(Aも)／ひ

しめく／ひらめく／隔たる／へつらふ／まどろむ／みまかる

／催す(Aも)／▲休らふ／呼ばはる／よろこぶ／▲をののく

【C類】 関はる

【D類】 裏かく／事問ふ／▲宣ふ／▲在す

【E類】 ▲慎む／▲もてなす

## 二二 二段活用動詞

【A類】 未然形●●●●／連用形●●●○△●●●●▽／\*

終止形●●●○△●●●▽／連体形●●●●／\*已然形●●●●○／命令形●●●○

●●●○／命令形●●●○

【B類】 未然形●●●○△●●●○▽／連用形●●●○△●●●▽／\*終止形●●●○△●●●▽／\*連体形●●●○△●●●▽／\*已然形●●●○△●●●▽

●●●▽／\*終止形●●●○△●●●▽／連体形●●●○△●●●▽

／\*已然形●●●○△●●●▽／命令形●●●○△●●●▽

【C類】 未然形●●●●／連用形●●●●△●●●▽／\*

終止形●●●●／\*連体形●●●●／\*已然形●●●●○／\*

\*命令形●●●○

【D類】 \*未然形●●●○△●●●○▽／連用形●●●○△●●●○▽／\*終止形●●●○△●●●○▽／\*連体形●●●○△●●●○▽／\*已然形●●●○△●●●○▽／\*命令形●●●○△●●●○▽

所属語彙は以下の通りである。

【A類】 ▲戒む／▲埋もる／▲訴ふ(Bも)／訪る／▲考ふ／

こしらふ／先立つ／妨ぐ／従ふ／しはがる／戯る／▲平らぐ／

慰む／やはらぐ

【B類】 改む(Aも)／現はる(Aも)／うなだる／衰ふ／傾く／かみさぶ／心得／したたむ／退く／調ふ／▲永らふ／▲なぞらふ／にらまふ／免る／横だふ／わきまふ／悪びる

【C類】 ▲捕らはる／▲参らす

【D類】 先駆く

所属語彙のうち、中古から現代にいたるまでに類の変化したものには▲を付した(注九)。ただし江戸期のB類所属語彙は現代までにほぼすべてA類化するため、この変化については▲を付していない。また、いくつかの類にまたがって現れる語については、用例数や曲節の新旧(注十)、史の変遷等を考慮して所属を決定した。所属判断の根拠となった具体例については後の資料編を参照されたい。

### 三 調査結果の検討

所属語彙を見ると、四段活用動詞・二段活用動詞ともにA類には一類動詞、B類には二類動詞、C類には三類動詞(注十二)、D類には二語から成ると考えられる動詞が属しているようである。以下、類の変化を中心に何らかの問題点のある語について述べていく。用例( )内の数字は尾崎家本のページ数、a b

c dはそれぞれ一ページ内の右上・左上・右下・左下部分を指し、その下に曲節を示す。譜記・曲節のうち略記したものは資料編の最後にまとめて載せた。譜記は当該動詞に付されたもののみを示し、下接語の譜記は省略した。

### 三一 四段活用動詞

① 一類から二類への変化を起こしたと考えられる語彙「連なる」「休らふ」「をののく」(以上、江戸期以前)「欺く」「憐れむ」「ぎぎめく」「漂ふ」(以上、江戸期)。「欺く」「憐れむ」「ぎぎめく」「漂ふ」は平曲に一二類の譜記が併存しているが、「欺くに―上上××(668 a 白)／あざむかれ―上上上上(79 a 口)」「憐れんで―上上××(373 d 白)／憐れみ―上上××(119 b 口)(95 d 口)：「ぎぎめき―上上××(406 b 白)／ぎぎめき―上上××(114 c 口)」「ただよはせ―上上上上××(430 d 白)(109 c 白)／ただよわせ―上上上上(1112 c 口)」等、二類に表記された箇所が白声、一類に表記された箇所が口説であることからして、江戸期に一類動詞から二類動詞へ変化していた可能性がある。「憐れむ」は江戸期以前にも一類→二類傾向が見えるが、平曲では一類の用例数がかなり多い故(一類例七箇所、二類例一箇所)一類として扱った。

平曲資料に反映した四音節動詞のアクセント

② 二類から一類への変化を起こしたと考えられる語彙「いぎなふ」「営む」「卑しむ」「樂しむ」「をさまる」(以上、江戸期以前、江戸期の二類動詞ほぼすべて(江戸期以降))。

③ 一類・二類の揺れを見せる時期のある語彙「たなびく」(鎌倉期)「集まる」「従ふ」(以上、室町期)「遊ばす」「怪しむ」「争ふ」「驚く」「片敷く」「語らふ」「かなぐる」「定まる」「しつらふ」「助かる」「つぶやく」「貫く」「計らふ」「はばかり」「催す」(以上、江戸期)。「怪しむ」については「あやしんで―上上××(338 b 白)／怪しんで―上上××(848 d 口)」の如く二類表記の方が新しいように思われるが、室町→江戸期にかけての資料と考えられる『大疏談義』『仮名声』等にも二類の例がある(注十二)。「争ふ」「驚く」「定まる」「しつらふ」「貫く」「計らふ」「催す」は出自も平曲での例も二類だが、平曲にごく少数の一類例が見られるものである。江戸期以降の二類→一類傾向が早めに起こったものかもしれない。

④ 二類から三類への変化を起こしたと考えられる語彙「息づく」(江戸期以降)。なお、現在三類である語には「息づく」「生け捕る」「関わる」「ささわる」「もてなす」、過去に三類の例がある語には「差し置く」「うけたふ」等があるが、平曲中に用例があるのは「息づく」「もてなす」のみである。

⑤ D類から一類への変化を起こしたと考えられる語彙「**宣ふ**」「**在す**」(以上、江戸期以降)。平曲当時D類であるとした四語のうち「**裏かく**」「**事問ふ**」については現代京都アクセントの資料がないため断言はできないが、D類は現代までにほぼ一類化したと言えようか。

⑥ E類から三類への変化を起こしたと考えられる語彙「**もてなす**」(江戸期以降)。「**もてなす**」は鎌倉期もE類であったと考えられている(注十三)が、特殊未然形の○●●○型は従来この類にはなかったものである。○●●○↓○●●●●(○●○●●)という変化の過渡期の状態であろうか。二類動詞等の特殊形(一般形よりアクセント核が一つないし二つ後ろにずれる)に類推したものかもしれない。

なお江戸期以前にE類相当の語とされている「**異なり**(異なる)」(注十四)は形容動詞と考えたため除外したが、あえて含むならば、平曲でもやはりE類に含まれる。「**こと**なり。―×上××(828 a 白) ことなるに―××××(577 d 口)、ことなる御恙―××××(308 d 口)」等。一般未然形にはアクセントを確定できるような例はあまりないが、「**こと**ならず―折ハシ×(763 d 呂)」等からして○●○○の可能性が強い。現代京都では「**異なる**」は一類もしくはE類とされ(注十五)、いずれに

しても「**もてなす**」の動きとは一致しない。

⑦ その他の揺れを見せる語彙「**いただく**」「**慎む**」。「**いただく**」は江戸期以前一類、平曲では「**いた**だひたり―上上××(228 a 口) / **いた**だく。―ハ掛××(1176 c 口ハリ下ゲ)」の如く一類・D類併存。「**慎む**」は平安期二類であるが『**仮名声**』には解しにくい譜記例があり(注十六)、平曲では「**ツツシン**デーオコア×(1162 b ハコビ)」の如きE類の例が一例存するのみである。

⑧ その他―一類とした語彙の中「**うやまふ**」「**重なる**」「**たばかる**」「**とどまる**」「**伴う**」「**始まる**」にはそれぞれ「**うやま**つて―ハ×××(1193 c ハコビ) / **重**なつて―上上上上(402 c 白) 上上上(267 b 拾) 上×××(238 a 口) / **た**ばかつて―上上上上(79 c 白) 上上上(1028 a) / **と**どまつて―上上上(99 d 口) (228 b 口) / **伴**つて―上上××(1213 a 白) 始まつて―上上上(889 b 口)」等、連用形●●●●型・●●○○型の例も見られるが、これらは促音部分にアクセントの下がり目を担わせる不都合さ故の変容であり、揺れではないと考えた。「**罵**たる―上上××(1031 b 白) / **罵**たり―上上上上(982 c 口ハリ下ゲ)」についても同様である。

### 三一 二段活用動詞

① 一類から二類への変化を起こしたと考えられる語彙「なぞらふ」(平安期〜鎌倉期)。

② 二類から一類への変化を起こしたと考えられる語彙「考ふ」「平らぐ」(以上、江戸期以前)「訴ふ」(江戸期)江戸期の二類動詞ほぼすべて(江戸期以降)。「訴ふ」は江戸期以前二類で平曲にも二類の例が見られるが、ほとんどの例は一類化している。

③ 一類・二類の揺れを見せる時期のある語彙「永らふ」(鎌倉期)「改む」「現はる」(以上、江戸期)。「改む」「現はる」は二類出自で、平曲における用例もほとんど二類だが「改められ上上上上コ(470 d 下ゲ)」「顯れさせ上上上上コ(227 a 口)」といった例も存する。二段活用動詞の二類特殊未然形については「む」が下接した場合に●●●○型、「らる」「さす」が下接した場合に●●●●型をとる」という傾向も見られるのだが、用例の少なさや四段活用動詞との関係を考慮し、ここでは特殊未然形●●●●型を一類の例として処理した。

④ 一類から三類への変化を起こしたと考えられる語彙「埋もる」「訴ふ」(共に江戸期以降)。ただし「訴ふ」は資料により現代京都語アクセントに揺れがある(注十七)。

⑤ 三類から一類への変化を起こしたと考えられる語彙「参らす」(江戸期以降)。

⑥ 二類から三類への変化を起こしたと考えられる語彙「捕らはる」(江戸期以前)。

⑦ その他「まいらっさせーオハ××(738 c 指)××上上(577 d 口)××上上(909 c 白)(909 d 白)／まいらせめー××上(135 c 白)」の如く「参らす」未然形は○●●●○●●●○●●●○●●●○●●●○という揺れを見せるが、これらはアクセント核には関わりのない音声的変容と解釈した。アクセントの上がり目が遅いものほど新しい曲節に現れることからして、○●●●型が現在の○●●●型になるまでの過渡期的現象であろう。「参らせー××上コア(383 c 拾)××上××(641 d 口)／××上××(165 c 白)」「とらわれてー××上××(970 d 口)／××上××(1296 c 白)」といった「参らす」「捕らはる」連用形における○●●●○●●●○●●●○の揺れもこれに準ずる。

また「参らす」の場合、「まいらせざりー××上××(823 d 口)／まいらせうー××上××(300 a 白)」の如く未然形のアクセントが連用形と同じになってしまっている例がいくつか見られるが、これは文字通り連用形の影響を受けたものと言えようか。未然形の例の大半は「まいらつ(させ)」と語末が促音便化して



しまっている。これに対し少数の音便化していない未然形「まいらせ」「む」「ず」等の上接は、形の同じ連用形「まいらせ」に類推したのではないかと思われる。

#### 四 まとめ

アクセント類の体系については、先学の研究にほぼ準じる。二段活用動詞における三類動詞及びD類動詞の例は従来あまり見られなかったものであるが、たまたま該当語彙がなかったものであろう。四段活用動詞の例から考えてもその存在は予想できるものである。

類の変化については、江戸期→現代にかけての二類・D類→一類傾向が顕著である他は、個別の揺れや変化を見せているにとどまる。二類動詞連用形○○●●型がそのまま体系的変化を迎えた場合に現われていたであろう●○○○型はD類の連用形と同じ形であるが、二類とD類との揺れはほとんど見られない。

最後に三音節三類動詞特殊未然形の問題についてであるが、右の調査結果からすると「参らす」(三類動詞「参る」特殊未然形+助動詞「す」)「捕らはる」(三類動詞「捕らふ」特殊未

然形+助動詞「る」)は共に三類動詞○○●●型である。体系的变化以前から三音節三類動詞特殊未然形は○○●●型であったと考えるほうが妥当と言えよう。「捕らはる」は三―二の⑤で述べた如く鎌倉期二類とされている(注十八)が、確例とは言えないようである。本稿でも確例と言えないものや単独例によって判断したものが多々あり、他の資料等によって確認する作業が必要であらう。五音節以上の動詞の体系、二・三類動詞の特殊形の問題等も今後の課題である。

資料編(各々の語について最も分かりやすい譜記一―二を記した。)

#### 四段活用動詞

【A類】遊ばす「遊ばひて―上上コ×(1261c口)(244a口)」「隣れむ」「隣れみ―上上コ×(119b口)(95d口)」「あなどる」「あなどられん―上上上上(424a指)」「いぎなふ」「誘ひ―上上コ×(434b口)」「いたたく」「戴ひたり―上上コ×(228a口)」「當む」「當み―上上上×(872a白)」「卑しむ」「卑しまれ―上上上コ(294b強)」「失ふ」「失ひて―上上コ×(648d口)」「失へ―上上上×(389c白)」「疑ふ」「疑はれ―上上上上(320a白)」「うやまふ」「敬ひ―上上上×(165b白)」「怠る」「怠らせ―上上上上(110a白)」「

行ふ「行ひ—上上上×(874 b 白)／行へ—上上上×(408 a 口)」「  
 輝く「かがやいて—上上上×(77 d 走三重)」「重なる「重なり、  
 —上上上×(953 b 上音)」「語らふ「かたらはれて—上  
 上上(452 c 白)」「悲しむ「悲しんで—上上上×(619 b 口)」「(552  
 c 口)」「通はず「かよはして—上上上×(1088 b 口)」「悔しむ「悔  
 しみたまひ—上上上×(318 c 口)」「候らふ「候らひ—上上上×  
 (478 c 白)」「候らへ—上上上×(382 a 口)」「先立つ「先立ち—上  
 上上×(37 a 口)」「(1003 a 口)」「さぶらふ「侍ひ—上上上×(561 c  
 口)」「侍へ—上上上×(822 d 口)」「したがふ「随ひ—上上上×  
 (596 a 口)」「(418 a 口)」「(556 c 口)」「たなびく「たなびいて—上上  
 上×(570 d 口)」「楽しむ「楽しみ—上上上×(1315 d シヲリ)」「た  
 ばかる「たばかり—上上上×(1028 a 拾)」「たばさむ「たばさみ  
 ける—上上上×(111 a 拾)」「遣はす「遣はして—上上上×(175 a  
 口)」「(318 d 口)」「(319 b 口)」「伝はる「伝はりける—上上上×(96  
 a 口)」「とどまる「とどまり—上上上×(926 d 口)」「甲ふ(とぶ  
 らふ)「とぶらひ—上上上×(1010 a 口)」「(1055 c 口)」「訪ふ(とぶ  
 らふ)「訪ひ—上上上×(1298 c 白)」「上上上×(881 a 口)」「伴ふ」と  
 もなひ、—×××シ(1216 d 指)」「慰む「慰み—上上上×(646 d  
 口)」「(761 a 口)」「(1074 b 口)」「ののしる「ののしり—上上上×(858  
 a 白)」「育む「育み—上上上×(698 c 口)」「(603 b 口)」「始まる「始

つて—上上上×(889 b 口)」「働く「働らき—上上上×(681 b 白)」「  
 はばかる「憚り—上上上×(381 c 口)」「上上上×(433 c 白)」「寒  
 がる「ふさがり—×××掛(314 a 拾)」「振舞ふ「振舞もの—上  
 上上(301 b 白)」「欲しがる「ほしがらるる—上上上×(788 c  
 口)」「施す「施させ—上上上×(48 c 口)」「(1236 c 口)」「亡ぼす「亡  
 ぼして—上上上×(719 b 口)」「(859 b 口)」「(564 b 口)」「導く「導き  
 —上上上×(277 b 口)」「むつかる「むつからせ—上上上×(431  
 c 口)」「めぐらす「めぐらしける—上上上×(720 b 白)」「やはら  
 ぐ「和らぎたまふ—上上上×(312 b 口)」「よそほふ「粧ひ、—  
 上上上×(265 b 拾)」「よっぴく「よっぴいて—上上上×(445 d  
 白)」「(461 d 白)」「若やぐ「若やがふ—ハ×××(424 a 指)」「わず  
 らふ「わづらひたる—上上上×(1310 b シヲリ)」「をさまる「治  
 まれる—×××シ(678 d 三重甲)」「

【B類】欺く「欺くに—上上上×(668 a 白)」「預かる「預り—  
 上上上×(353 c 白)」「(1104 d 白)」「集まる「集まる—上上上×(1234  
 c 口)」「(939 a 口)」「怪しむ「あやしんで—上上上×(338 b 白)」「  
 あやまつ「過つ事—上上上×(850 c 口)」「争ふ「あらそひて—  
 上上上×(1282 a 白)」「上上上×(349 d 口)」「表す「あらわし—上  
 上上×(650 d 口)」「(266 b 口)」「息づく「息つき—上上上×(1045 a  
 口)」「上上上×(539 b 口)」「いさかふ「いさかい—上上上×(1106

d口)「いたはる」「いたわり―上上××(646 d口)(1093 a口)」「うなづく」「うなづひて―中中掛×(168 b口ハリ下ゲ)」「占ふ」「占ひ―上上××(716 b白)」「羨む」「うらやむ者―上上××(805 c口)(805 c口)」「潤す」「うるをすが―上上××(556 c口)」「驚く」「驚ひて―上コ××(849 d口)(424 d口)」「赴く」「おもむけば―上コ××(1091 a口)(604 d口)」「蒙る」「蒙り―上上××(78 b口)(853 b口)」「片敷く」「片して―上上××(373 d白)」「傾く」「傾ひて―上コア×(916 c拾)(482 c拾)」「かなぐる」「かなぐり―上上××(1030 c白)」「からかふ」「からかひ―ウ小入×(143 c初重中音)」「がらめく」「がらめき―上上××(745 a口)」「極まる」「極る迄―上上××(1386 a折)」「ぎざめく」「ぎざめき―上上××(406 b白)」「ささやく」「ささやき―上上××(264 d白)」「定まる」「定まりしか―上コ××(616 b口)」「しぐらむ」「しぐらふで―上上××(438 b白)」「静まる」「しづまり―上コ××(1052 c口)(783 a口)」「しつらふ」「しつらうて―上上××(133 d白)(120 a口)」「退く」「退く―上コア×(454 d上音) 上コ××(1101 d口)」「備はる」「備わり―上上××(1294 b白) 助かる」「助かり―上上××(625 a口) 上コ××(1128 a口)」「戦ふ」「戦ひ、―上コ××(404 c口)(988 c口) 上上××(402 d白)」「たたずむ」「たたずみ―上コ××(1330 c口) 上上××(392 b口)」「漂ふ」「ただよはせ―上

上上××(430 d白)(1090 c白)「賜る」「給り―上コ××(496 c口)(403 c口)(112 d口)」「近づく」「近づき―上上××(900 c口)(324 a拾)(1147 a口)」「繕ふ」「つくろはせ―上上コ××(383 b口) 上上コア(1381 d拾)」「つぶやく」「つぶやかれ―上上上××(1158 d白)」「爪よる」「つまよって―上コ××(1110 d口)」「連なる」「連なる。―上上××(93 d白)」「貫く」「貫き―上コ××(735 b口) 上コア×(1046 c上音)」「ときめく」「時めき―上コ××(279 c口)」「どよめく」「どよめきけり―上上××(537 c白)」「靡かす」「靡かすに―上コ××(556 d口)」「悩ます」「悩まし―上コ××(113 d口)(650 c口)」「計らふ」「はからへと―上上××(1124 d白)」「ひしめく」「ひしめきけり―上コ××(500 b口)(709 b口)」「ひらめく」「ひらめいたり―上コ××(1098 b口)」「隔たる」「へだたつて―上コ××(1208 a口)」「へつらふ」「へつらひ―上コ××(677 a口)」「まどろむ」「まどろみ―上コ××(716 c口)(28 c口)(786 c口)」「みまかる」「身罷り―上上××(573 a口)」「催す」「催し―上上××(1282 b白)(294 d拾)」「休らふ」「やすらふ事―上上××(653 b白)」「呼ばはる」「呼はったりければ―上上××(344 d白)」「よろこぶ」「悦び―上上××(889 d白)(901 c白)(269 b白)」「をのく」「をのひて―上上××(217 b白)」「

【C類】関はる「かかはる―中上上ウ(655 c折)」「

【D類】裏かく「裏かく矢—上×××(583 d 白)」「こととふ」事  
問ひ—上×××(1312 c シヲリ)「宣ふ」宣へば—コ×××(164  
a 口)「在す」ましまさば—コ×××(1236 c 口)」「  
【E類】慎む「ツツシンデーオコア×(1162 b ハコビ)」「もてな  
す」もてなして—××××(531 d 口)」「(1131 c 口)」「

二 二段活用動詞

【A類】戒む「いましめて—上上×××(477 a 口)」「(862 d 口)」「埋  
もる」うづもれて—上上×××(1196 b 口)」「(953 d 口)」「訴ふ「訴へ  
申す—上上×××(94 a 口)」「(381 c 口)」「訪る「おとづるるやう—  
上上上上(104 b 白)」「考ふ「考へさせ—上上上上(659 b 口)」「  
こしらふ「こしらへ、—上上×××(250 c 口)」「(685 b 口)」「先立つ  
「先立てて—上上×××(1281 a 口)」「(1145 c 口)」「妨ぐ「妨けん—上  
上上上(533 b 白)」「従ふ「したがへて—上上上上×(509 c 白)」「(509  
c 白)」「しはがる「しわがれたる—中中中強(327 a コハリ下ゲ)」「  
戯る「戯れて—上上×××(203 d 上音)」「平らぐ「平らげたり—  
上上××(26 a 口)」「慰む「慰め参ら—上上×××(238 d 口)」「上  
上上×(1079 c 白)」「やはらぐ「やわらげ治む—××××下(26 d  
三重甲)」「横だふ「横だへ—上上×××(91 d 口)」「上上上×(93  
d 白)」「

【B類】改む「改めず—××オハ(257 c 下ゲ)」「あらはる「顕れ  
—上×××(305 c 口)」「(891 a 口)」「うなだる「うなだれ、—上×××  
×(325 b 口)」「衰ふ「おとろへたる—上××××(819 a 口)」「上コア  
×(1308 a シヲリ)」「傾く「傾け、—上コア×(1101 b 拾)(454 c 上  
音)」「かみさぶ「神さびて—ウ小入×(728 a 中音)」「心得「心得て  
—上×××(559 c 口)」「(394 a 口)」「したたむ「したためて—上上×  
×(318 d 口)」「退く「退け、—上××××(110 c 口)」「調ふ「調てこ  
そ—上上×××(135 c 白)」「永らふ「ながらへたる—上××××(1073 c 口)」「  
(547 c 口)」「なぞらふ「準へて—上××××(306 d 口)」「にらまふ  
「にらまへて—上××××(744 a 口)」「(745 c 口)」「免る「まぬかれ  
ける—上××××(1285 c 口)」「わきまふ「辨へたる—上上×××(380 d 拾)」「  
悪びる「はるびれたる—上上シ上(863 c コハリ下ゲ)」「  
【C類】捕らはる「とらはれさせ—××上上(430 d 白)」「参ら  
す「まいらつさせ—××上上(714 d 白)」「(909 d 白)」「  
【D類】先駆く「先駆て—コア×××(1029 c 拾)」「先かけたらん—  
上××××(345 b 口)」「

\*略記した譜記・曲節

譜記名「×—無譜記／上—上(ジョウ)／コーコ上／中—中(チ  
ユウ)／ハ—張(ハリ)／オー抑(オサへ)／アー中(アタリ)

／小一廻(コマハシ)／折一折(ヲリ)／ウー浮(ウキ)／  
 シー沈(シツミ)／掛一掛(カケ)／入一入(イリ)／強一強  
 (コハリ)／下一廻(下)

曲節名「白一白声(もしくは素声)／口一口説／強一強声／シ  
 ヲリ一シヲリ口説／折一折声／指一指声」

注一 金田一春彦氏『四座講式の研究』(三省堂 昭和三十九  
 年) 391頁～394頁等。

注二 特殊形とは、未然形・連用形・終止形にある種の助動詞  
 が接続した場合に現れる形。金田一春彦氏『四座講式の研究』  
 359頁、奥村三雄氏『平曲譜本の研究』(桜楓社 昭和五十六  
 年) 359～404頁等参照。

注三 「三音節二類動詞特殊未然形+「す」(もしくは「る」)」  
 という語構成の四音節動詞に関しては、秋永一枝氏『古今和  
 歌集声点本の研究 研究篇下』(校倉書房 平成三年) 97頁  
 に「句はず」の○○○●型例が挙げられ、金田一春彦氏『四  
 座講式の研究』399頁では「縛らる」「惜まる」の○○○●型  
 が想定されている。奥村三雄氏『平曲譜本の研究』481～483頁  
 等も参照。

注四 金田一春彦氏『四座講式の研究』397頁等。

注五 ○○○型説—金田一春彦氏『四座講式の研究』379頁、秋  
 永一枝氏『古今和歌集声点本の研究 研究篇下』91、95、112  
 頁等。○●●型説—奥村三雄氏『平曲譜本の研究』366～368頁、

坂本清恵氏「動詞未然形のアクセントと付属語の接続につい  
 て—近松世話物浄瑠璃本を資料にして—」(辻村敏樹教授古  
 稀記念 日本語史の諸問題 明治書院 平成四年)、上野和  
 昭氏『京都方言アクセントの遡行—近世後期以降の3拍動詞  
 類推変化についての考察—』(『国語学』第百七十二集 平成  
 五年三月)等。

注六 金田一春彦氏・清水功氏・近藤政美氏編『平家物語総索  
 引』(学習研究社 昭和四十八年)に基づく。

注七 平曲等における複合動詞については上野和昭氏に「近世  
 における複合動詞のアクセント」(『国語学研究と資料』第十  
 三号 平成元年十二月)「平曲譜本にみえる動詞の接合アク  
 セントについて」(『徳島大学国語国文学』第三号 平成二年  
 三月)等の詳しい論考がある。

注八 平家正節刊行会編『平家正節』(大学堂書店 昭和四十  
 九年)

注九 江戸期までの京都語アクセントについては望月郁子氏編  
 『類聚名義抄四種声点付和訓集成』(笠間書院 昭和四十九

年)、秋永一枝氏『古今和歌集声点本の研究』、金田一春彦氏『四座講式の研究』、桜井茂治氏『新義真言宗伝「補志記」の国語学的研究』(桜楓社 昭和五十二年)、『中世京都アクセントの史的研究』(桜楓社 昭和五十九年)、奥村三雄氏『平曲譜本の研究』等を、現代京都語アクセントについては平山輝男氏編『全国アクセント辞典』(東京堂出版 昭和三十五年)、『日本国語大辞典』(小学館 昭和四十七、五十年 現代京都語アクセント欄は榎垣実氏担当)の京都アクセント欄等を参照した。

注十 口説・白声は他の曲節より新しい時代のアクセントを、特に白声は『平家正節』成立当時のアクセントを反映していると言われる。詳しくは金田一春彦氏『平曲の音声 下』(『音声学会会報』百一号 昭和三十四年)等参照。

注十一 四音節動詞における語類は一・二類以外明確にされていないが、一・三音節動詞に準じ、ここではこのC類を三類と称しておく。

注十二 桜井茂治氏『中世京都アクセントの史的研究』234、235、669頁等。

注十三 金田一春彦氏『四座講式の研究』397頁。

注十四 金田一春彦氏『四座講式の研究』389、390、397頁、桜井

平曲資料に反映した四音節動詞のアクセント

茂治氏『中世京都アクセントの史的研究』669、674頁等。

注十五 『全国アクセント辞典』で●●●●型、『日本国語大辞典』で○○○○型とされている。

注十六 桜井茂治氏『中世京都アクセントの史的研究』241、242頁等。

注十七 『全国アクセント辞典』で●●●●●●型、『日本国語大辞典』で○○○○●●型とされている。

注十八 金田一春彦氏『四座講式の研究』258、398頁。

(おくむら かずこ・本学助手)